

かぐや姫症候群に関する考察

準ひきこもり行動との関連から

Princess Kaguya Syndrome: Its Relationship to Semi-“Hikikomori” Behavior

樋口 康彦
HIGUCHI Yasuhiko

目的

翁が竹の中から見つけたかぐや姫が、俗世での暮らしを経てやがて昇天してしまうという内容の『竹取物語』は日本人にとって最もポピュラーな昔話のひとつである。

さて、この物語を改めて分析してみると、社会に対する適応・不適応を扱った側面があるということに気がつく。愛情込めて育て、一見周囲に適応しているかのように見えながらかぐや姫が、ある日突然、養育者の理解できない世界に旅立ってしまう。一見、正常に成長しているように見え、ある期間を幸せに暮らしたものの、苦勞して育てたかぐや姫は元々俗世に真の適応をすることが不可能な身であった。そして、いつか彼女にとってふさわしい世界へと行ってしまふことが必然だったのである。そして現代の一部の大学生は、周囲の人たちや本人さえも理解しないうちにかぐや姫が辿ったコースをそのままなぞってしまう。(Table 1 参照)

Table 1

かぐや姫の進路	準ひきこもりの進路
月世界(元々の住処)	自分だけの世界。大学時代以前の元々の住処。
俗世(適応しているかのように見えるが実は偽りの適応)	大学での生活(社会生活)。適応しているかのように見えるが実は偽りの適応。
月世界(元々の住処)	自分だけの世界(元々の住処)。本格的なひきこもり生活へ。偽りの適応の後は元の世界へ。

月世界と俗世を対象的に描き、俗世に居たいと思いつつも結局は抗いがたい力で異界(月世界)に連れて行かれるというかぐや姫の人生は、まさに準ひきこもり(樋口, 2006)の人生(: 社会に出たいと思いつつも結局は引きこもってしまう)に対応している。つまり、異界に旅出つことは社会進出をかたくなに拒みひきこもってしまうことの比喩となっている。以上のことから、準ひきこもりはかぐや姫症候群と言えるかもしれない。

本論ではこの物語を題材に準ひきこもりに関する理論を深めて行きたい。

竹取物語について

成立した年代：よくわかっていないがおおよそ9世紀に書かれたという説が有力である。

作者：不祥であるが、当時の男性知識人ではないかと言われている。

物語の概略

以下に物語の概略を示す。物語は大きく5つに分かれている。

- (1)かぐや姫の登場：ある日、翁が竹の中から掌に乗るくらいの大きさのかぐや姫を発見する。家に持ち帰り育てると、3ヵ月ほどで非常に美しい成人女性となる。
- (2)貴族たちの求婚：多くの男がかぐや姫に夢中になり、求婚する。その中でも特に熱心だったのが5人の貴族である。かぐや姫は彼らに結婚の条件として、難題を課す。各貴族はかぐや姫が求めた物を手に入れようと奮闘するがいずれも失敗し、不幸な末路を辿る。
- (3)御門の求婚：御門が求婚するが、かぐや姫はこれも拒絶する。
- (4)かぐや姫の昇天：元々月世界の人であったかぐや姫に迎えがやって来る。御門はかぐや姫を取られまいと2千人の兵で迎え撃つが、失敗する。かぐや姫は昇天する。
- (5)エピローグ：御門はかぐや姫に宛てた手紙とかぐや姫からもらった不死の薬を富士山の頂上で焼き捨てさせる。

かぐや姫と準ひきこもりについて

(原文)

この児、養ふ程に、すすくと大きになりまさる。三月ばかりになる程に、よき程なる人に成りぬれば、髪上げなどさうして、髪上げさせ、裳着す。帳のうちよりも出ださず、いつき養ふ。この児のかたちけうらなる事世になく、屋のうちは暗き所なく光満ちたり。翁、心地あしく苦しき時も、この子を見れば、苦しきこともやみぬ。腹立たしきことも慰みけり。

(現代語訳)

この子は、育てているうちに、すすくと成長していく。三ヵ月ほど経つと、一人前の大きさの人になってしまったので、髪を結び裳を着せる。帳の中からも出さないで大切に育てる。この子の容貌の清らかで美しいことは世に類が無く、家の中は暗いところがないほど光に満ちている。翁は気分が悪く、苦しいときも、この子を見ると治ってしまう。腹立たしいことも慰められるのだった。

かぐや姫は三ヵ月ほどで成人となる。このことから、成長や発達課題に対する通常概念ではとらえられない存在であることがわかる。またかぐや姫は固く保護されており、働いていないし友人もいない。

準ひきこもり大学生の親はその子を心の支えにし、過保護に育てていることが多い。そのため子どもは経験不足になりがちである。経験不足は、対人関係調整能力を奪い、自分が世間から期待されている役割についての認識を曖昧にしてしまう。

準ひきこもりは、ほとんど同世代の人と触れ合うことはなく、将来のために努力することもなく、大学4年間を夢のようなことを空想しながらひたすら自分だけの世界で過ごす。その間、現実から目を背け独特の世界観を形成して行く。自分の言動についてのフィードバックがない世界で何年も暮らした結果、ごく僅かではあるが、すっかり現実感覚を失い自己中心的な妄想の世界にいる者もいる。

彼(彼女)の考えている常識と世間一般の常識との間にはずれが生じており、それは年月の経過とともに徐々に大きくなって行く。

(原文)

世界の男、貴なるも賤しきも、いかでこのかぐや姫を得てしがな、見てしがなと、おとに聞きめでてまどふ。そのあたりの垣にも、家のとにも、をる人だにたはやすく見るまじきものを、夜は安きいも寝ず、闇の

夜に出でて、穴をくじり、かいばみまどひあへり。

(現代語訳)

世の男は、身分の高い者も低い者も、このかぐや姫を、妻にしたいものだ、結婚したいものだとうわさに聞いて心を惑わせる。垣根にも戸口にも穴を開け、(その家の人でさえもたやすくかぐや姫を見ることはできないのに)夜も寝ず、闇の夜に出て行き、覗き見をして、みんな理性を失ってしまっている。

ここに登場する5人の貴族はかぐや姫を通常のコースに戻そうとする力、勤労モラル、あるいは社会のモラルを擬人化したものである。それは世の中に非常に強く充満しており、常に人を追いまわし、人の頭から離れない。

準ひきこもりの大学生たちは、通常年代の者達が出て行く時期になったとしても懸命に社会から逃れようとするが、社会はどこまでも追いかけてきて、彼らを追い詰める。

(原文)

「翁、年七十に余りぬ。今日とも明日とも知らず。この世の人は、男は女にあふ事をす。女は男にあふ事をす。その後なむ門広くもなり侍る。いかでか、さることなくてはおはせん」。…(中略)…翁のあらむ限りは、かうてもいますかりなむかし。この人々の年月をへて、かうのみいましつづのたまふことを、思ひ定めて、一人一人にあひたてまつり給ひね」

(現代語訳)

「爺は、七十歳を越えた。今日明日をも知れない命です。この世の人は、男は女と結婚し、女は男と結婚します。そうして一族は大きく発展していきます。どうしてあなただけが結婚しないでいられましょうか。…(中略)…爺が生きている間はこうしていることも可能でしょう。しかし、あの人たちが長い間、このようにおいでになって求婚されていることをよく考えて、どなたか一人と結婚して下さい」

法的な規制があるわけではないが、社会には暗黙のルールが張り巡らされている。通常、成人に対しては、社会に出て自立すること、結婚して家庭を持つことなどが求められている。これに男性ならばリーダーシップを発揮すること、妻子を養うことなどが加わる。そしてこれらのことを成人になっても達成できない人に対しては極めて強い圧力がかけられる。

翁はここで世の中の常識を持ち出して諭している。翁の言った「親が生きている間はこういう暮らしも可能だろうが、その後のことを考えて就職・結婚しなさい」という説得は、ひきこもりを子に持つ親が現代でも行うことであろう。

(原文)

「親ののたまふことを、ひたぶるに辞ひ申さんことのいとほしさに、取りがたきものを」。かくあさましくてもてきたることをねたく思ひ、…略…

(現代語訳)

「親がおっしゃることをむやみに拒み続けることの気の毒さから、手に入れがたいものを持って来るよう言ったのに…」。意外にも、皇子が持ってきたことをいまいましく思い、…略…

以前にかぐや姫は5人の貴族に対し、結婚するための条件として手に入れがたい物を持って来るよう要求した。そしてこの場面で、実は要求したものを欲しい訳ではなく、初めから結婚するのが嫌だから絶対に用意できない物を要求して親を諦めさせたかった、ということを通らさず。

準ひきこもりは自分が社会参加できない理由として、様々なことを口にする。そしてある障害さえなければきちんと働くとか、この条件さえクリアされればきちんと働く、などと言う。しかしそれは社会に出たくないために口にしていただけであり、周囲の人が障害を取り除こうとしても無駄な努力に終わる。その障害のために社会に出て行けないのではなく、まず社会に出たくないという強い気持ちがあり、そこに理由をこじつけているだけだからである。仮にその障害を取り除いたとしても、彼は多分また別の障害を口にするだろう。

(原文)

かぐや姫に、「はや、かの御使ひに対面したまへ」と言へば、かぐや姫、「よきかたちにもあらず。いかでか見ゆべき」と言へば、「うたてものたまふかな。御門の御使ひをばいかでおろかにせむ」と言へば、かぐ

や姫答ふるやう、「御門の召してのたまはん事、かしこしとも思はず」と言ひて、さらに見ゆべくもあらず。... (中略)...

内侍、「必ず見たてまつりてまゐれ、と仰せごとありつるものを、見たてまつらでは、いかでか帰りまゐらむ。国王の仰せごとを、まさに世に住み給はん人の、うけたまわり給はで有りなむや。いはれぬ事なし給ひそ」と、言葉恥づかしく言ひければ、これを聞いて、まして、かぐや姫、聞くべくもあらず。「国王の仰せ言を背かば、はや殺し給ひてよかし」と言ふ。

(現代語訳)

かぐや姫に、「すぐに、あの使者に対面しなさい」と言うと、かぐや姫は、「私は美人ではありません。どうしてお会いできるでしょうか」と言ったので、「困ったことをおっしゃる。御門の御使いを、どうしておるそかにできるでしょうか」と言うと、かぐや姫は次のように答える、「御門がお召しになって仰られたとしても、恐れ多いとも思いません」と言って、いっこうに姿を見せようとはしない。... (中略)...

内侍は、「御門は必ずお会いすると仰せられたのに、お会いせずにどうして帰れましょうか。御門のおっしゃることを、この世に住んでおられる人がどうしてお受けなさらずにいられましょうか。馬鹿げたことをなさらないで下さい」と、お婆さんが恥じるほどの強い口調で言ったので、これを聞いたかぐや姫はなおさら承知するはずもない。「御門のおっしゃることに背いたのならば、早く殺して下さい」と言った。

御門は通常の人生コースへの最後の誘い、ぎりぎりの時期になってからの、親やその他の親戚も含めた最後のいざないを象徴している。

準ひきこもりの学生は、話題が仕事のことになると豹変し、強い意志ではねつけてしまうため説得はうまくいかない。彼らが示す社会に出ることへの拒絶はなんとなく気が進まないという程度の事ではなく、もっと積極的な拒絶である。自分の存在・命をかけた激しい拒絶である。それは、複雑な人間関係に巻き込まれるとつらい目に合うという過去の学習に由来している。それゆえ、この件に関しては、親からの懸命の説得や脅しにも屈することはないであろう。

(原文)

仰せ給ふ、「などか、翁の手におほし立てたらむものを、心にまかせざらむ。この女もしたてまつりたるものならば、翁に冠を、などか賜はせざらん」

(現代語訳)

御門がおっしゃるには、「どうして、翁の手で育てたのに、思い通りにならないのか。この女をもしもらえるなら、翁に官位を与えないであろうか」

なぜ自分の子なのに言うことをきかせることができないのか、というのはひきこもりを持つ親に世間から投げかけられる典型的な問のひとつであろう。準ひきこもり大学生は以前(小学・中学・高校時代)に不登校を経験していることが多く、その場合親は腫れ物に触るようには扱っている。小遣い等を十二分に与えるだけで、就職活動をしなかったり、早期退職したりしても何も文句を言えないということがよく見られる。

(原文)

翁喜びて、家に帰りて、かぐや姫に語らふやう、「かくなむ御門の仰せ給へる。なほやは仕うまつり給はぬ」と言へば、かぐや姫答へていはく、「もはら、さやうの宮仕へ仕うまつらじと思ふを、しひて仕うまつらせ給はば消え失せなんす。御宮冠仕うまつりて、死ぬばかりなり」。翁いらふるやう、「なし給ひ。宮冠も、わが子を見たてまつらでは、何にかはせむ。さはありとも、などか宮仕へをし給はざらむ。死に給ふべきやうやあるべき」と言ふ。「猶そら事かと、仕うまつらせて、死なずやあると見給へ。あまたの人の、心ざしおろかならざりしを、空しくしなしてしこそあれ。昨日今日御門ののたまはむことにつかん、人聞きやさし」と言へば、翁答へていはく、「天下の事は、とありとも、かかりとも、み命の危さこそ、大きな障りなれば、猶仕うまつるまじき事を、まゐりて申さん」とて、まゐりて申すやう、「仰せの言をかしこさに、かの童を、まゐらせむとて仕うまつれば、宮仕へに出だし立てば死ぬべし、と申す。造つこまるが手に生ませたる子にもあらず。昔、山にて見つけたる。かかれば、心ばせも世の人に似ず侍り」と奏せさす。

(現代語訳)

翁は喜んで、家に帰ってかぐや姫に次のように説得した、「このように御門は仰せになられた。それでもやはりお仕えなさらないのか」、かぐや姫がそれに答えて言うには、「一切、そのような宮仕えはしんないと思っておりますので、無理にお仕えさせようとなさるならば死ぬつもりです。官位を差し上げた後、私は死ぬだけです」。翁が答えて、「そんなことをなさるな。官位など、わが子を見られなくなつては何になるうか。それにしても、どうして宮仕えをなさらないのか。死ななければならぬ理由があるのか」と言う。「嘘だ

と思うのなら、お仕えさせ死なずにいるか見て下さい。多くの私への思いが深かった人たちを殺してしまったのに、昨日今日に御門がおっしゃったことに従うのは、世間に対して恥ずかしい」と言うと、翁は、「世間がどう言おうと、あなたの命の危さが、大事であるので、やはり宮仕えできないことを宮中に参って申し上げましょう」と言い、宮中に参って、「仰せのおことばの恐れ多さに、あの子を参上させようとあれこれいたしましたら、宮仕えに出させたら死ぬと申します。造つこまろが生ませた子でもありません。昔、山で見つけたのです。そのような訳で、性格が世間一般の人に似ていないのです」と他の人を通じ伝えてもらった。

かぐや姫は、無理に宮仕えをさせるなら死ぬ、とまで言う。元々かぐや姫には、この世界に根を張って生きて行くことができないという前提があり、俗世とコミットメントを深めるようなことは極力避けたいというのが本音であろう。

準ひきこもりの大学生は社会に出て行くことをかたくなに拒む。社会への恐怖感、自分を傷つけるかもしれない環境からなんとしても逃げ出したいという防衛本能がそういう行動を取らせるのである。

また準ひきこもりの親には特有の甘さがあり、世間がどう言おうと子どもの命こそが一番大事であるとして、強く社会への参加を促さないことが多い。働かないなら家から出て行け、という方針の親の元からは、ひきこもりは生まれにくい。

(原文)

春のはじめより、かぐや姫、月のおもしろく出でたるを見て、常よりも物思ひたるさまなり。ある人の、「月の顔見るは忌むこと」と制しけれども、ともすれば人まにも月を見ては、いみじく泣き給ふ。...(中略)

...

翁、「月な見給ひそ。これを見給へば、物思すけしきはあるぞ」と言へば、「いかで月を見ではあらん」とて、猶、月いづれば、出でゐつつなげき思へり。夕やみには、物思はぬ気色なり。月の程に成りぬれば、猶、時々はうち嘆きなどす。これを、使ふ者ども、「なほ物思す事あるべし」とささやけど、親をはじめて、何とも知らず。

(現代語訳)

春の初めから、かぐや姫は、月がきれいに出現しているのを見て、いつもより物思いにふける様子である。側で仕えている人が、「月を見るのは不吉なことです」と制したが、ともすれば人のいない間にも月を見ては、ひどくお泣きになる。...(中略)...

翁は、「月を御覧になってはいけません。これを御覧になると、物思いに沈んでしまう」と言うと、「どうして月を見ずにいられましょうか」と言って、やはり、月が出ると出て行って嘆いて物思いに沈んでいる。夕闇には物思いに沈まないようである。月の出るところになるとやはり、時々お嘆きになる。仕えている者たちは「やはり心配事があるに違いない」とささやくが、親をはじめ、なぜか理由がわからない。

かぐや姫は完全に別の世界にいるわけではなく、一見この世界に属しているように見える。しかしそれは、ただ体がそこにあるというだけであり、本質的には所属していない。

準ひきこもりの学生は大学生活が終盤に差し掛かり否がおうでも就職活動を始めなければならない時期になると自分だけの世界(子どもの世界)と実社会(大人の世界)との板挟みに合って身動きが取れなくなる。自分は他の学生のように、OB・OG訪問をしたり、会社に電話をかけたり、面接を受けて競争的状况の中で自分をアピールするなどといったことができないということに改めて気づくことになる。また、その後待っている会社勤めについては、考えただけで気が滅入って逃げ出したくなってしまふ。

準ひきこもりにとって居心地のよい世界は、もちろん子どもの世界である。彼らは大人の世界に入らなければならない期限が来たとしても、なんとかして子どもの世界に留まろうとする。準ひきこもりにとって実社会(大人の世界)は脅威以外の何ものでもない。しかし4年間という長い月日もいつかは終わりを告げる。

仮にある時期は実社会からうまく逃げおおせたとしても、根本的な解決には至らない。所詮はその場凌ぎのことであり人と触れ合うことが苦手という弱点を克服しない限り、鬱々とした毎日を送らなければならない。準ひきこもりは、他の同年代の若者と同じように、覚悟を決めて驚異の大人の世界に入らなければならないことがなかなかできない。

(原文)

かぐや姫泣く泣く言ふ、「さきざきも申さむと思ひしかども、かならず心惑ひし給はんものぞと思ひて、いままで過し侍りつるなり。さのみやはとて、うち出で侍りぬるぞ。おのが身はこの国の人にもあらず。月の都の人なり。それを昔の契りありけるによりなん、この世界にはまうで来たりける。いまは帰るべきになりければ、この月の十五日に、かのもとの国より、迎へに人々まうで来んず。さらずまかりぬべければ、思しなげかんが悲しき事を、この春より思ひなげき侍るなり」と言ひて、いみじく泣くを、... (略)...

(現代語訳)

かぐや姫が泣く泣く言うことには、「以前にも申し上げようと思いましたが、きっと心をお惑わされになると思って、今まで過ごしてきました。けれどもそうしてばかりいられようかとおもい、打ち明けます。私はこの国の人ではありません。月の都の人なのです。前世の約束があったため、この世界に参ったのです。もう帰らなければならなくなり、今月十五日に、あのもといた国から迎えがやってくるでしょう。避けられないことであり、お嘆きになることが悲しく、この春から嘆いていたのです」と言って、ひどく泣くので、... (略)...

かぐや姫はここで正式にカミングアウトする。

準ひきこもりは親から守られた環境の中で自分の未熟さや問題点をさほど意識することなく、現実社会をはるか遠くに感じたままに就職活動のシーズンを迎えてしまう。過保護は社会への適応力を奪い、現実を見えなくさせてしまう。準ひきこもりは現実から逃げ、自分の中に独特の世界観を形成し、そしてすっかり現実感や行動力をなくしてしまっているのである。大学生の間は何とかなったとしても、社会との密接な関係が避けられない時期になると、大きなしっぺ返しが来る。

準ひきこもりの学生が辿る進路としては次のようなものが挙げられる。

やりたいことがあるから就職しないといい、卒業後はひきこもるかアルバイトなどの負荷の低いことをする。

大学院に進学する。または専門学校などに進学する。

公務員試験や大学院を目指し、浪人する。

など、モラトリアムを延ばすこと。

就職活動をし、合格し、勤めを始めるもののすぐに辞めて引きこもる。

正直に、「社会が怖い。だから社会に出ていくことができない」と口にし、就職活動を行わない。

社会が恐くて就職活動や就職に二の足を踏んでしまうとカミングアウトするのは自分の弱さを告げることであり、よほど問い詰められない限りは口にしない。そのため、自分でもなぜ社会に出て行けないのか理由がわからない、などと言うことがある。

(原文)

翁、「こはなでふ事のたまふぞ。竹の中より見つけきこえたりしかど、菜種の大きさおはせしを、わが丈立ち並ぶまで養ひたてまつりたるわが子を、なに人が迎へきこえん。まさに許さんや」と言ひて、「われこそ死なめ」とて、泣きののしる事、いと耐へがたげなり。

(現代語訳)

翁は、「これは何ということをおっしゃるのか。竹の中から見つけて、種粒くらいの大きさでしたのを、私の背丈に立ち並ぶまでに養ってさしあげたわが子を、誰が迎えに来るといのか。決して許せない」と言い、「私の方が死んでしまおう」と泣き騒ぎ、非常に耐え難い様子である。

この場面での翁の心情は、自分の子が社会に出て行けないことを知った時の現代の親の心情に通じるものがある。なぜ自分の子どもだけがそうなのか、一生養い続けなければならないのか、立派にならなくても良いからせめて人並みになってほしい、というのはひきこもりの親の本音ではないだろうか。しかし準ひきこもりが長年かけて築いてしまった自分と社会との壁はとて高いため乗り越えることは難しい。

(原文)

かぐや姫のいはく、「月の都の人にて、父母あり。かた時の間とて、かの国よりまうで来しかども、かくこの国にはあまたの年をへぬるになんありける。かの国の父母の事も覚えず、ここには、かく久しく遊びきこえて、ならひたてまつれり。いみじからむ心地もせず。悲しくのみある。されどおのが心ならず、まかりなむとする」と言ひて、もろともいみじく泣く。

(現代語訳)

かぐや姫が言うことには、「月の都の人である父母がいます。ほんの僅かな間ということで、あの国からやって参りましたが、このようにこの国では長い年月を過ぎてしまったのです。あの国の父母のことを思い出すこともなく、ここでこのように長く過ごさせていただき、慣れさせていただきました。帰ることになってあまりうれしいという気はしません。悲しいだけです。けれども私の意志に反して、お別れするのです」と言って、いっしょになってひどく泣く。

準ひきこもりは、自分自身では他の人と同じように社会に出て行きたいと思っているのだが、どうしてもできないのである。

一般に人は実社会にいる自分と趣味の世界にいる自分とを使い分けている。このうち人が本当に居たい世界、心が安らぐ世界はもちろん自分の趣味の世界である。しかしその世界は、もう一方で社会参加し自立してはじめて存分に楽しむことができる。つまり実社会との繋がりが失われたとしたら、自分の趣味の世界を楽しむこともできないのである。しかし準ひきこもりは自分の趣味の時間、趣味の世界の中でしか生きていけない。

(原文)

かぐや姫いはく、「こわ高になのたまひそ。屋の上にいる人どもの聞くに、いとまसानし。いますかりつる心ざしどもを思ひ知らで、まかりなむずる事のくちおしう侍りけり。長き契りのなかりければ、程なくまかりぬべきなめりと思ふが、悲しく侍るなり。親達の顧みをいささかだに仕うまつらで、まからむ道も安くもあるまじき。日ごろも出でて、今年ばかりの暇を申しつれど、さらに許されぬによりてなむ、かく思ひ嘆き侍る。み心をのみ惑はして去りなむことの、悲しく耐へがたく侍るなり。かの都の人は、いとけうらに、老いをせずなん。思ふ事もなく侍るなり。さる所へまからむずるも、いみじくも侍らず。老い衰へ給へるさまを見たてまつらざらむこそ、恋しからめ」と言ひて、...(略)...

(現代語訳)

かぐや姫が言うことには、「大声でおっしゃらないで下さい。屋根の上にいる人たちが聞くと、たいそうみっともないではないですか。これまでの心ざしを忘れたかのようにお別れするのが、残念です。長くとどまるという約束がなかったために、間もなく行ってしまうことが悲しいのです。親たちのお世話を少しもいたさず、帰り道も私の心は安らかにはならないでしょう。この何日かの間、端に出て座って、今年いっぱい暇を申し出たのですが、どうしても許されず、このように思い嘆いています。お心を悩まして去ってしまうことを、悲しく耐え難く思います。あの月の都の人は、たいそう美しく、老いることはないのです。思い悩むこともありません。そのような所へ行くのですが、うれしくもありません。老い衰える様子を見て差し上げられないのが心残りです」と言い、...(略)...

異界に戻らざるを得ないが、別にうれしくはないというのは本音であろうし、また親が老いて行くのを助けられないことを悲しく思うというのも本音であろう。

準ひきこもりは社会経験の不足から、社会常識に欠け、不適切な言動を取ることがあるものの、知能やその他は正常であり、良心も兼ね備えている。社会参加しないことを良くないことだと認識しているし、両親に対する思いやりも持っている。親に対しては内心申し訳ないと思っているし、自分に対しては情けないと感じている。

最後に

(原文)

「かくあまたの人を賜ひて止めさせ給へど、許さぬ迎へまうで来て、とりみてまかりぬれば、くちおしく悲しき事。宮仕へ仕うまつらずなりぬるも、かくわづらはしき身にて侍れば、心得ずおぼしめされつらめども、心強くうけたまはずなりにし事、なめげなる物に思しめし止められぬるなん、心にとどまり侍りぬる」

今はとて天の羽衣きるをりぞ君をあはれと思ひいでける

とて、壺の薬添へて、頭中将呼び寄せてたてまつらす。中将に天人とりて伝ふ。中将取りつれば、ふと天の羽衣うち着せたとまつりつれば、翁をいとほしく、かなしと思しつる事も失せぬ。この衣着つる人は、もの思ひなく成りにければ、車に乗りて、百人ばかり天人具して昇りぬ。

(現代語訳)

「このように多くの人を遣わし止めようとなさいましたが、どうにもできない迎えが参り、連れて行ってしまいますことを、残念で悲しく思います。このように訳ありの身でありましたので、ご納得できないでし

ようけれど、宮仕えを強情にお受けしなかったのです、無礼な者とお思いになり心にとどめておられることが、心残りです」と書いて、次に

今日の羽衣を着るときになって、あなたのことをしみじみ思い出します。

と書いて、壺の薬を添えて、頭中將を呼び寄せて御門に献上させる。中將に天人が手渡した。中將が受け取ると、回りの天人が不意に天の羽衣をかぐや姫にお着せした、するとかぐや姫のこれまで翁を“かわいそう、不憫だ”と思っていた気持ちが消えてしまった。この羽衣を着た人は、何かを思い煩うことがなくなってしまうので、車に乗って、百人ばかりの天人を引き連れて、昇天してしまった。

準ひきこもりには、大学生活を無為に過ごしてしまうという問題がある。また、その後社会に適應できず、本人はもとより周囲の者も大変苦しむという問題がある。

準ひきこもりは大学に入学したことがきっかけで発症するのだが、実はもっと前の段階から準備がなされている。元々人付き合いの苦手な人が、人と付き合いに生きていける人間関係の真空地帯である大学に入学することで、ますますその傾向を強めてしまうことによって起きるのである。

社会性や社会的スキルといったものは、人が社会で生きて行くための必要条件である。友人や人付き合いがかぐや姫症候群を発症しないための予防薬となるであろう。また友人や人付き合いこそがこの症候群を発症した際の特効薬となるであろう。

この物語はかぐや姫の昇天で終わるが、物語の登場人物とは異なり、準ひきこもりは昇天することができない。その後も人生は続くことになる。かぐや姫症候群に対しては早期発見が大切であるし、もしなってしまった場合には早期治療(早期指導)が大切である。

最後に、かぐや姫は女性であるがかぐや姫症候群に陥るのはどちらかというと男性に多いように思われる。しかし彼らは男性役割を身につけることができず従来女性のようにか弱い。

参考文献

- 蜂屋 真 1990 無気力と学習性無気力説 流通科学大学論集(人文・自然編), 2, 101-111.
- 樋口康彦 2005 大学生における準ひきこもり行動に関する理論的考察 キャンパスの孤立者 富山国際大学国際教養学部紀要(印刷中)
- 板津裕己 1995 自己受容性と生きる姿勢, Hopelessness との関わりについて カウンセリング研究, 28, 37-46.
- 鎌原雅彦・亀谷秀樹・樋口一辰 1983 人間の学習性無力感(Learned Helplessness)に関する研究 教育心理学研究, 31(1), 80-95.
- 河合冬樹・坂野雄二 1983 獲得された無力感と Locus of Control に関する実験的研究 千葉大学教育学部紀要, 32(1), 21-29.
- 水谷友史子・倉戸ヨシヤ 1994 日本での Learned Helplessness 理論に関する一考察 アパシーと原因帰属様式との関連から 大阪市立大学生生活科学部紀要, 42, 99-106.
- 境 泉洋・石川信一・佐藤 寛・坂野雄二 2004 ひきこもり行動チェックリスト(H B C L)の開発および信頼性と妥当性の検討 カウンセリング研究, 37, 210-220.
- 土川隆史 1992 アパシー学生への援助技法 現代のエスプリ, 296, 132-143.